誌上行学講習会

高佐日煌上人

心が欲望を生むものですが、誰が人間の心をつくったかは、これから学ぶ中に皆様に解って参ります。ともかく心の中から自然に湧き起って来るものはすべて合目的であると考へてよいのであります。その欲望の基幹（きかん）即ち大根になっているのが四つあって、それが我々の究竟目的になるのであります。

「（一）死にたくない。いつまでも生きていたい故に不死の生命を求めんとする」

第一に死にたくないという欲があげられます。皆さんは如何ですか。死にたくない、いつまでも生きていたい。此れはなかなか重大問題なのです。先祖代々死現に眼の前で人が死んで行くのです。先祖代々死なかった人はないのであります。いくら長生きをしたといっても所詮時間の問題なのです。然るに人は死にたくない。そこではっきりいえることは死にたくないというのは死なない生命を求めているということであります。

此の近くの法恩寺は太田道灌公の建立した江戸草分けの寺であり、当善行院はその末寺であります。その法恩寺に太田蜀山人の墓があります。太田南畝といいまして江戸時代の狂歌師として有名な人でありまして此の人が辞世の歌を残しましたが実に此の人らしい歌であります。「今までは人のことだと思うたが、俺の番とはこいつたまらん」と詠んでいます。いよいよ自分に死期が迫って来た。今までは人のことだとおもっていたらいよいよ自分の番が来たのかという意味でしょう。

九州の博多へ行きますと日蓮大聖人の銅像があります。これを建立した方は佐野前励という方であります。なかなかの豪傑でありました。朝鮮の国王をにせの金の香炉でだまして、京城内どこへ行くにもフリーパスの許可を得たという程の人であります。

当時の国王李王家は朝鮮を統一するときにコウという国と戦争いたしました。コウは大変熱心な仏教を奉じ、李王家は仏教でなく儒教を奉じておりました関係で、戦争に勝ちますと仏教をひどく弾圧いたしました。僧侶を賤民に落としてしまい人としての平等なつきあいを出来なくさせてしまったのであります。ところが反対に弾圧された仏教寺院はかへって繁盛し、立派になってしまいました。不思議なひにくのようなことですが、朝鮮の寺はみな金持ちになってしまったのです。理由は儒教を国教にしたので、極めて形式的な道徳にかたより、例へば親が死ぬと三年間喪にふくする。その三年間は夫婦といへどもどうきん出来ない。一緒に寝られない。こんなことの出来る人間はこの世界、地球上には住んでいません。そんなわけでもし子供が出来ても表向き届出ることが出来ない。そこでその子供の食いぶちをつけて他国即ちコウのお寺へやってしまう。お寺はその子供を引取ってお坊さんにさせます。お寺はていのよい私生児引き受け所となりますが、ただで引き受ける筈はありません。必ず金か田地田畠をいただくことになります。それがたまりにたまって大変な金持ち成金になってしまったのであります。